

本文

Q-1. (1) Plaza Mayor 「マヨール広場」という固有名詞ではなく、日本語で言う所の「中央広場」のように使われる言葉なのですか？

A-1. Plaza Mayor は固有名詞です。Plaza Mayor は「大きな広場」という意味ですが、普通名詞が大文字で書かれて固有名詞として使われます。おっしゃるとおり日本語でも「中央広場」という固有名詞がありますから、そのような感じです。固有名詞なのでそれぞれの都市の固有のもので、一般にどの都市にもある、ということはありません。また、大都市に必ずあるとも限りません(たとえば Barcelona)。一方小さな村にさえあることもあります(たとえば Madrid の南にある小さな村 Chinchón)。

Q-2. (2) 「～前」の hace と「hace ~ que」の hace の意味の違いは HP の解説で分かったのですが、「～前」の hace も hacer に由来しているのですか？

A-2. 「～前」の hace も hacer の活用形です。どちらも hacía, hacía que という線過去で使われることがあります。

Q-3. (4) Juan の台詞で接続法が使われているのは、友子さんに合わせているからですか？友子さんが「Espero que me haya llegado la tarjeta de Navidad.」のように、接続法を使って家族からクリスマスカードが来る事を望んでいるので、Juan も友子さんにクリスマスカードが来ることを望んで接続法を使っているのですか？

A-3. いいえ、ここで cuando の節で接続法が使われているのは、「時」を示す副詞節が将来のことを指し「可能性」を示しているからです。

Q-4. (4) Cuando la hayas recibido, tienes que avisarme porque me gustaría ver el sellos de correos. で avisar が使われていますが、informar とどのように使い分ければよいのですか？

A-4. informar というのは情報を伝えるというニュアンスがあり、また言葉がちょっと堅い感じがしますが、この例文では informar を使ってもよいと思います。

Q-5. (14) ya の使い方が良く分からないのですが、動詞の前後、どちらにも置けるのですか？

A-5. ya などの副詞に位置は比較的自由ですが、動詞の前にあることが多いようです。

Q-6. (18) Ahora va a venir un amigo mío que es torero. で va a venir とありますが、esta

veniendo とすることは可能ですか？

A-6. まず veniendo ではなくて viniendo です。venir や ir のような動詞は進行の意味でふつうは使われません。英語では I'm coming とか Where are you going? というのを、スペイン語では Voy. ¿Adónde vas? と言います。それからご質問の例文の場合の va a venir ですが、これから来る、という未来のことを表しています。スペイン語では進行形で未来を表すことはありません。

Q-7. (19)「接続法のスイッチ」になる No creo que... ですが、No creo que tarda nada. という文は存在しませんか？

A-7. No creo が直説法をとる場合もあります。それは、¿Crees que tarda mucho? のような疑問文に答えるときですが、これは非常に微妙で接続法しか認めない人もいます。初級のスペイン語では簡単に主節のスイッチで説明しますが、実はまだまだ難しい問題があります。

文法

1. 接続法・現在・規則変化

Q-1-1. 接続法は「願望」、「可能性」etc.といったいろいろな意味がありますが、どのように区別したらいいのでしょうか。

Q-1-2. 接続法の用法がいまいちパツとわからない。おそらく、主観的な文章で主に用いられると解釈していいのでしょうか？

Q-1-3. 接続法は英語の仮定法と似ている気がする。接続法は提案、主張の節内で should を使う英語の文法と似ているものを感じました。

Q-1-4. まだ接続法がいまいちよくわからない。活用はややこしくても自分で整理して覚えられるけれど概念そのものは自分では学びにくいので、もう少し詳しくどんなときに使われるのかとか教えてほしいです。

A-1. 次の HP の「学習ガイド」が参考になると思います。とくに p.6 以降を参照してください。

<http://lecture.ecc.u-tokyo.ac.jp/~cueda/gakusyu/guia/dousi/secugen.pdf>

Q-2. どうして「主観的な事」というだけで接続法という独特の活用をし、新たな文法の体系として確立する必然性があったのですか？ 形容詞を使ったり、倒置したり、と工夫次第でここまで大掛かりな事をしなくても大丈夫だった気がするのですが。

A-2. 接続法は動詞の活用変化の問題なので、形容詞や副詞で示される主観性とはシステム

が異なります。活用変化は法（直説法と接続法）、時制、人称という要素が組み合わされて使われます。

Q-3. 接続法の使われ方がまだ実感として分かりません。意味に「願望」「可能性」「否定」「疑惑」があるようですが、これは例えば「願望」なら「～を望む」のような単語を伴わなくても接続法だけでこの意味になると言う事なのですか？ それともそのような単語と呼応して意味を成すのでしょうか？

A-3. 後で習う願望文のように単独でも接続法が使われることがありますが、これも「～を望む」のような接続法を要求する要素が省略されたものと考えられます。そこで接続法は基本的に「願望」「可能性」「否定」「疑惑」などの主観が及ぶ従属節に現れます。このパターンを教科書や副教材で現れた度毎にチェックしていきましょう。

Q-4. 「主観的な事」を述べる時に、前の課で形容詞＋名詞の順になる、とありましたが、この時には何故直説法が使われていたのでしょうか？ HP の解説に「主観的・心理的な内容であれば接続法が使われ、客観的な内容であれば直説法が使われる」とありましたが、あまり厳密ではないのですか？

A-4. 形容詞＋名詞の順で示される主観性は形容詞の位置の問題です。形容詞が名詞の前にあると、主観的な意味を帯びます。一方、接続法は「願望」「可能性」「否定」「疑惑」という主観的な要素が従属節に働く場合で、これは動詞の変化形に現れます。どちらも「主観」という言葉が用いられていますが、一方は形容詞の位置、他方は動詞の変化の問題で、両者は異なります。

Q-5. *querer* = *want* と覚えてきたので、*querer que* という表現を見たとき一瞬とまどった。*want that ...* という表現がないからだ。英語と対応させると覚えやすかったりするけど、違うところもあるので注意したい。

A-5. 確かに *querer* は *want* に対応することが多いのですが、*wish* のように使われることもあります。（それから *love* も。）

Q-6. 接続法はなぜ接続法というのかわからない。何につながっているのだろうか。

A-6. 「接続法」はスペイン語の *subjuntivo* の訳語ですが、これは *sub-*（下に、従属して）＋*junct*（繋げる）という意味です。従属文の中で用いられることが多いので、このような名前がついています（後で習う命令文や願望文では主文で使われます）。

Q-7. 接続法現在はどうして *ar* 動詞と *er* 動詞の活用の仕方を逆にしたのだろうか。人がしゃべっている言語なので自然にこうなったはずだが、一体どのようなプロセスでこのようになったのだろうか？

A-7. 私もスペイン語を最初に勉強したとき、こんな不思議なことがあるものなのか、と思いました。直説法と接続法の間で活用語尾を交換するなんて！ラテン語の歴史形態論の本 (Alfred Ernout, *Morphologie historique du latin*, Paris, Klincksiek, 1974)によると (p.160-161) ,ラテン語の古い形オスクウンブリア語で接続法の語尾は-a-#という長い母音でした。しかし、この語尾を are 動詞 (スペイン語の ar 動詞) にそのままつけると直説法と混同してします。そこで a#re 動詞には、-a-#のバリエーションとして存在していた-e-#という語尾をつけたということです。ですから、「活用語尾を交換する」などということではなく、接続法のそれぞれの形には合理的な由来があったことがわかりました。初級スペイン語教育では言語の歴史まで扱いませんから、どうしても表面的に「逆転する」という説明の仕方になります。それでも、先の説明を読むと、なぜ接続法で1人称単数と3人称単数が同じ形になるかがわかります。ar 動詞、er / ir 動詞にそれぞれ統一した接続法を表す母音があったからです。

Q-8. 文法の授業で接続法を習いました。“No creo que ~ ”のように「~だとは思わない」という文では接続法を使うと習ったのですが、では疑問文で“¿No crees que ~?”「君は~だと思わないか？」という文では接続法を使うのでしょうか？それとも直説法で良いのでしょうか？

A-8. ¿No crees que...?の疑問文では直説法も接続法も可能です。直説法では質問した人が que...以下の内容について確信があり、それについて相手が信じないということを問題にしています。たとえば(1) ¿No crees que este libro es interesante? 「君はこの本がおもしろいと思わないの？」というときは直説法になります。一方、(2)¿No crees que este libro sea interesante? 「君はこの本がおもしろいなんて思わないでしょ？」というときは接続法です。(1)は聞き手がこの本を面白いと思っている感じが出ていますし、(2)では聞き手はそのことに疑念を抱いていて、それを相手にも確認している感じです。

また、creer の疑問文では否定でなくても、肯定形でもやはり直説法と接続法がどちらも可能です。先の例を使うと、(1) ¿Crees que este libro es interesante? 「君はこの本がおもしろいと思う？」というときは直説法になり、一方、¿Crees que este libro sea interesante? 「君はこの本がおもしろいなんて思うの？」というときは接続法です。そこで、私は接続法の要点は que 以下の仮想した内容について一定の「評価・主張」(ここでは「信じるに値する、信じられる」) がなされているときだと考えています。その評価の対象になっていることを、「... (だ) なんて」(思うの？、思わない) という日本語で表すことができます。一方、直説法は que 以下の内容を事実と見なして確信している場合に使います。

2 . 接続法・現在・不規則変化

Q-9. 語根母音変化で人称によってパターンがある場合にアクセントが関係しているとい

うことについて、あまりよくわかりませんでした。

A-9. スペイン語の動詞体系全体のなかで、人称によってアクセントの位置が移動するのは、現在形（直説法、接続法）と点過去強変化、命令形です。このように接続法現在にはアクセントの位置が動くので、アクセントが条件となる語根母音不規則変化が起こります。

Q-10. de と dé の区別のつけ方と、esté にアクセント記号がつくのは同じ理屈なんですか？ este と区別するためですか？

A-10. dar と estar の強勢の位置はどちらも語尾にある点で共通します。それは dar は語根が d という子音だけで、一方 estar は語根が est ですが、語頭の e は本来なかったものが、後で付加されたものです。ということで、どちらも語根が子音ばかりなのでしかたなく語尾に強勢があります。アクセント記号は、おっしゃるとおり、他の語と区別するために使われますが、これは de の場合です。este は、他の語(たとえば este) と区別するためというより語尾に強勢があることを示すことが必要だからです。

Q-11. 教科書 P.84 に、接続法現在の不規則変化の活用表がありますが sentir,dormir,pedir においては一人称複数、二人称複数の語根も変化しているが、直接法現在では語根に変化はなく、また pensar,contar においては接続法現在においても一人称複数、二人称複数の語根は変化していない。この違いはいったいどういう理由からくるものなのでしょうか。

A-11. 少し複雑な問題がからんでいます。実は、pensar と sentir、contar と dormir はそれぞれ異なる語根母音変化をします。直説法現在(p.19)ではたまたま同じように変化しますが、たとえば点過去では異なります。教科書 p.41 を見てください。ここでは、sentir, dormir は pedir の変化と同じになっていますね。一方、pensar と contar の点過去は規則変化になります。sentir と dormir はアクセントの規則による二重母音化(e > ie, o > ue)の他に、pedir と同じように働く閉母音化の変化があるのです(sentir は e > i; dormir は o > u)。閉母音化はアクセントの規則(語根にアクセントのある活用形で母音が変化する)とは関係しません。それは、「語尾に単母音の i があるときは語根が e (または dormir では o) となり、その他の場合は語根が i (または u) となる」という複雑な規則です。そうすると、点過去の sintió, sintieron では語尾が単母音の i ではなく二重母音なので語根が i になります。これは pedir も同じです。また、接続法現在でも sintamos, sintáis; durmamos, durmáis では語尾が i でないので、語根が i (または u) になっています。これも pedir と同じです。sentir と dormir が pedir と違うのは、二重母音化の規則も同時に働くことです。

語根母音変化全体を整理すると次の 5 種類になります。(1) pensar : 二重母音化, (2) contar : 二重母音化, (3) pedir : 閉母音化, (4) sentir : 二重母音化と閉母音化, (5) dormir : 二重母音化と閉母音化。なお、閉母音化が起こる母音変化動詞は ir 動詞だけです。一方、ar 動詞と er 動詞の母音変化は上の(1)、または(2)になります。なお、閉母音化の規則は複雑なので、初級文法ではむしろ変化表をそのまま全体で覚えてしまうという方法が採られ

ることが多いのです。

3 . 接続法・現在完了

Q-12. Cuando la haya recibido...と接続法現在完了が使われているが、これは英語で If I had done...と仮定文で過去形とかを使うのと同じようなものなのでしょうか。

A-12. 違います。非現実の仮定文については12課で勉強します。ここで cuando の節で接続法が使われているのは、「時」を示す副詞節が将来のことを指し「可能性」を示しているからです。(接続法)現在完了が使われているのは、将来のある時点までに、と未来完了の内容を言っているからです。